

この会場で、5-6 人の方から異口同音にご挨拶を頂きました。「高原さんて、YouTube で見るよりお若いのね。」それほどでも、あります。

今日は素晴らしい証しと賛美を聞き、それだけでも、ここに来た甲斐があると痛感したのですが、まず最初に、この会を色々お世話して下さったスタッフの皆様感謝します。初めてお招きを受けたのは、今から2年前です。「毎年秋に、ここでランチョンをやっているの、どうぞお越し下さい。」

でも、2年先までスケジュールがいっぱいで、「そしたら3年先はどうですか。」「それでも秋は駄目です。」と申し上げたら、「では、シーズン変えたらどうですか?」と言うんですよ。

シアトルは朝晩寒い、シアトルのクリスチャンは年がら年中熱い。その情熱に感激して、本当に今日を楽しみにしていました。皆様とこのような形で時間を共有できる事を、とても光栄に思っています。

今日は聖書預言の一部をご紹介したいのですが、私がこの点に取り組んでいるのには、一つ理由があります。私には子供が3人いて、男・男・女。長男は小さい時から怖がり、怖い話を聞いたり、怖い映像を見たり、怖い絵本を読むと必ず夜泣き。朝の3時か4時頃に「ギャー!」。だから、怖いものを出来るだけ見たくない。

ところが、小学3年の夏休みの宿題で課題図書感想文、その課題図書が何と『原爆の子供たち』。

表紙に、写真ではないのですが、大やけどを負った子供の絵が描いてありました。

それを見た瞬間に、「僕は読めない! ページ開く事できない! 読みたいくない!」。

でも、それだったら宿題出来ない。真面目な彼はどうしたか? 一番最後のページから読み出したんです。

「何をしてんねん?」と聞いたら、「最後を読んでハッピーエンドなら読み通す事ができる。最後の最後まで怖い・辛い・苦しいばかりだったら、やっぱり読めない。でも、途中が苦しくてもゴールが素晴らしいなら、読み継ぐ事ができる。」

僕はそれを聞いて、クリスチャンを励ますために書かれた終末預言とは結局これじゃないかと思えます。この地上で、信仰を持ってまっすぐ生きて行こうとすると、ガッカリする事・辛い事・祈っているのに中々応えられない事、色んな事があります。

しかし、キリストにある者が最終的に行き着くゴールは悲惨な世界じゃない。千年王国の後に新天新地がある。これは、神様が私たちのために準備して下さった究極のハッピーエンド。それは神様の理想が完全に成就している世界。泣いたり、苦しんだり、別れたり、色んな痛みがあるけど、かの国は涙がなく、別れもなく、苦しみも罪も死もない世界。そのゴールに刻一刻と近づいている。これが歴史の方向性です。

「これから嫌な事が待っている」と思って生きている人と、「いい事が待っている」と思って生きている人では、人生のプロセスの姿勢が全然変わってくると思います。

聖書が与えている希望は、究極の良きものがあって、そこに向かって刻一刻と近づいているのだと語っているのです。

ところで、この聖書預言・聖書が約束している事は、本当に信頼に値するのか?

信じる価値があるのか? それをどうやって確信する事ができるのか?

前もって語られた聖書預言の中で、既に歴史上実現・成就した事例を検証する事によって、それがいかに正確で間違いがないか、神が語られた事が確実に実現するかを確かめる事ができるのです。聖書が語る信仰は妄信・迷信・狂信じゃない。聖書の信仰と妄信はどこが違いますか？信じるに足る根拠があるので信じる。これが、聖書が語る信仰です。

私自身が目に見えない神様をどのようにして確信したかという聖書預言なんです。今日与えられているテーマは「歴史と聖書」。それで今日は、歴史を知る事によって、聖書の御言葉の確かさを検証できる箇所を選びました。それはダニエル書 11 章。本邦初演でございます。YouTube で発信するようになって困ったのは、同じ話ができないという事。それをやったら「もう、聞いたわ」とか言うてね。自分で自分の首を絞めているところがあるんです。

でも、それを聞いて、今まで「神様なんかいない」と思っていた人が「神がおられると分かりました。」今まで「キリストなんか知らない」と言っていた人が「私はキリストを信じました。」今までキリストと奥さんの信仰に反対していた人が「バプテスマを受けました。そして人生をキリストに献げました。」そんな話を聞くと、本当に生きてて良かったと思うんです。1 回しかない人生、この人生を誰かの人生の建設に貢献するために使って頂けるとするなら、こんなに素晴らしい事はない。それで毎回アップして、そして苦しみます。

ダニエルは今から 2600 年くらい前の人物です。

ダニエル 11:2 今、私はあなたに真理を告げる。見よ。なお三人の王がペルシアに起こり、第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。

私とは、神が未来の事を知らせるために派遣した御使い/天使。その天使があなた（ダニエル）に真理を告げる。神がダニエルに御使いを派遣して「これから世界がどんなところを通るのか、未来の世界がどうなるのか」を前もって預言している箇所です。

今とはどの時代か？ ダニエル 10:1 ペルシアの王キュロスの第三年に、この幻を見たと書いてあります。ペルシアにキュロス (?-BC529 or BC530) という王様がいました。彼がペルシアを建国した創設者・建国の父・ペルシアのワシントンみたいな。もうちょっと怖いけど。キュロスが政権に就いて、王様になって 3 年目の BC536 年にこの預言が与えられた。

見よ。なお三人の王がペルシアに起こり。今はキュロス王。でも彼の後に 3 人の王が起こる。第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。キュロスから数えて 4 番目の王様は、ペルシアの絶頂期に王になる人物。ペルシアの黄金時代は彼の時にやって来る。歴史の本を見たら、ペルシア絶頂期の王様の名前は、皆同じように書いてあります。

クセルクセス王。これはギリシャ語。ヘブライ語ではアハシュエロス王。彼のお妃がエステル。

エステル記には、アハシュエロス王（クセルクセス王）がどんな人物か、ユダヤ人女性のエステルがどうしてペルシア大王のお妃になったのかという経緯が書いてあります。

ところで問題があって、歴史を勉強している方は、もしかしたら引っかかっているかもしれません。ペルシア絶頂期のクセルクセス王（アハシュエロス王）は、大抵の歴史本には 4 代目の王と書いてある。ここでは、初代のキュロス王から尚 4 番目だから、キュロスから数えると 5 番目がクセルクセス王。

一般の歴史書では4代目。聖書では5代目。どちらが正しいのか？
そもそも、なぜこんなズレが出るのか？今日は、それを少し紹介したいと思います。

キュロス王には息子が2人いました。長男はカンビュセス。カタカナの名前ばかりで覚えられない人は「カンちゃん」と。いいじゃない、それで。次男はスメルディス。「スメオ」。

カンビュセス (?-BC522) が兄なので、キュロス王が亡くなった時、2代目の王として跡を継ぎました。しかし、彼は非常にヤバイ人。わがままというか、被害妄想的というか、ちょっとした事で怒りを爆発させる。とにかく厄介。わがまま放題・したい放題の限りを尽くす王。

彼に幾人かのお妃がいますが実の妹です。ペルシアでは、実の兄弟姉妹で夫婦になるのは厳格に禁じられていました。しかしカンビュセスは、自分の意見に反対する人たちを片端から殺していく。ペルシアの法学者たちを集めて「わしは妹のアトッサと結婚しようと思っているが、これはいい事か、悪い事か。あかんのか？」法学者は「王よ、ペルシアには法律があって、ペルシアの王はどんな願いでも叶えていいとあります。オッケー！」ホンマはあかんのです。でも、馬鹿正直にそれをやったら法学者たちは全滅ですよ。それで妹と結婚して「皆、文句ないよな。」誰も文句言いません。それを見届けて、もう1人の妹とも結婚する。メチャクチャな人。

カンビュセスは出来すぎた父の下で育ったわがまま息子。実力ないのに「父を超えたい、父もできなかった事をしたい」と野心がある。キュロス王でさえ出来なかった事の1つが、アフリカをペルシアの支配下に置く事でした。「親父も出来なかったし」とエジプト遠征に出ます。自分はペルシアにいて、軍隊だけ「お前ら、戦って来い！」と派遣したのではなく、自分も遠征軍の一員となって行った。それは、キュロス王がそうしたから。エジプトで戦って平定し、エチオピアも平定して、アフリカ大陸にペルシアの威力を知らせようと。

しかし、ちょっとやそつとで勝てるような相手ではなくて長期戦。長い間、本国ペルシアを留守にして、その間、政治を停滞させる訳にはいかないのだから、カンビュセスはマゴス（博士・ブレン）を置きます。アメリカなら大統領首席補佐官。トランプ大統領にとってのポルトンさんみたいな人。特に出来のいいマゴスが兄弟でいて、「わしが留守の間、ペルシアをうまいこと、回しといてくれ。」

そして自分はエジプトで戦うのですが、ある時、夢を見ました。ペルシアを留守にしている間に、弟のスメルディスが王位を横取りして、自分が王だと宣言する。いいですか？夢を見たんです。現実じゃない。夢。しかし、彼は大の被害妄想なので「正夢ではないか？神々が知らせてくれたのではないか？正夢に違いない！」と確信し、非常に忠実な部下のプラクサスペスに、「すぐペルシアに戻って、スメルディスを暗殺せよ。」ヒットマンを放ちました。

そして、エジプトまで同行させていた妹である妻に「わしはスメルディスに暗殺者を送った。」夫と言っても兄。でも、この兄は何をしでかすか分からない。その時に「何という事を！」と言ったらエライ事になるので「はい」と黙った。スメルディス (?-BC525 or BC522) は殺されました。

しばらくして、カンビュセスと彼女は、ライオンの子と犬が喧嘩しているのを見物していました。子供と言えどもライオンには力があって、犬が劣勢になって行きます。すると、それを見ていたその犬の兄弟犬がやって来て、2対1で子ライオンをやっつけました。その時、それを見た妻である妹が思わず泣いたんです。「お前、何で泣いてんねん？」つい「スメルディス

を思い出してしまって…」と言ってしまった。「なに？ お前はわしを非難するんか？ 獣でも兄弟は力を合わせて敵に向かって行くのに、人間は兄が弟を殺す獣以下だと、わしを批判しているのか？」この妹はどうなったでしょう？ 処刑です。こんな人、一緒にいてたらたまったもんじゃない。

そんな事がエジプトで起こっていた時、ペルシアでは何が起こっていたか？ スメルディアスが暗殺された事は大っぴらにされませんでした。国の中がめちゃくちゃになるので、闇から闇に葬ったのです。

その様子を見ていたマゴスの2人の兄弟はこう考えました。「カンビュセスは、以前から非常に危険な人物だったが限度を超えている。今までも部下や一般国民に残酷な事をして来たけど、ロイヤルファミリーの血を分けた自分の兄弟たちをも情け容赦なく殺して、相当イカれている。こんな王が君臨していたら、ペルシアは駄目になる。」

そこで、スメルディアスが殺されたのを誰も知らない事を逆に利用して、マゴスの1人ガウマータ（彼はスメルディアスと顔が似ていたんです）がスメルディアスになりすまして、ペルシア王の位に就いて、早馬で全ペルシアに新王即位を通知しました。「前王のカンビュセスはもう終わった。これからはスメルディアスが新しい王である。民よ、私を拝め。」

その伝令がエジプトのカンビュセスにも届きます。「暗殺者プラクサスパスを送ったのに、中々戻って来ないと思ったら、暗殺に失敗したのか？ 或いはスメルディアスに丸め込まれて、俺を裏切ったのか?!」激怒して、エジプト・エチオピア・アフリカ征服を一旦止めて、「こうなったら、内乱になるかもしれないが、武力で力を取り戻す!」

軍勢率いてペルシアに行こうと、馬にまたがった時にアクシデント。腰に差していた剣の鞘が割れてしまい、抜身の刃が彼の脛にグサッと入ったのです。すぐに抜いたけど、非常に傷が深くて動く事ができず、しばらく安静。ところが傷口から、今で言う人食いバクテリアが入った。全身が腐り出すような病気ですよ。カンビュセスは、のたうち回りながら死にました。

もはや、偽スメルディアスの命を狙う者は誰もいない。「カンビュセスよりも良い政治をしたら、自分に疑問を持つ者はいないだろう。」7か月間にわたって、前よりもかなり良い政治をします。

しかし、「このスメルディアスはどうもおかしい」と気づく人たちが出て来ました。それはペルシアの名門貴族たちで、その1人オタネスは「スメルディアスは王として即位するや否や、宮殿から一步も外に出ないし、貴族たちに会おうともしない。なぜだろう。ちょっとおかしい。」

そこでオタネスは、娘を使って情報を得ようとしています。娘はカンビュセスの妻の1人でした。一夫多妻。偽スメルディアスは王になった時、カンビュセスの妻たちを全員自分の女性にしたんです。大変好色な人。オタネスは娘に「夜に呼ばれたら、本物のスメルディアスかどうか、顔よく見てみ。」
「お父様、私、本物のスメルディアス様を見た事はありません。」「ええっ!」

カンビュセスは2人の妹と結婚していました。1人はエジプトで殺されたけど、もう1人のアトッサはペルシアに残している。「それならアトッサ様に聞いてみ。アトッサ様はキュロス王の娘で、スメルディアスの妹だから、顔を忘れるはずがない。」「お父様、それはなりません。彼女は、誰も近づけない隔離場所に閉じ込められていて面会できないのです。スメルディアス様が王になられた直後から。」
ますます怪しい。

そこで「彼が熟睡している時に、あなたの手をスメルディアの耳に当ててごらん。」

偽スメルディアであるマゴスのガウマータは、キュロス王が生きていた時に、ちょっとした間違いを犯したので、キュロス王が怒って、自ら彼の両耳をそぎ落としたんです。なので、マゴスであれば耳がない。夜に呼ばれた時、彼女は実行しました。耳はなかった。「これで、動かぬ証拠をつかんだぞ。」

偽スメルディアを権力の座から引き下ろすため、オタネスは特に信頼できる名門貴族を6人集めました。自分を入れて7人のグループ。その中に、**ダレイオス・ヒュスタスパス** (BC550頃-BC486) がいます。「ダレイオス・ヒュスタスパスって、誰イオス?」と覚えたらいいんですよ。覚えなくてもいいですわ。ヒュスタスパスという名がついていますが、キュロス王の叔父さん。キュロス王と血の繋がりがあある。

「仲間をもっと増やして周りを取り囲み、彼らを少数派にしてやっつけよう」という意見にダレイオスは反対して、「仲間を増やせば増やすほど、情報は漏れるもの。その中の1人が裏切るかもしれない。時間は先延ばしにすればするほど、私たちに不利になる。今立ち上がってスメルディアを殺すしかない。さあ、行きましょう!」

ダレイオスはリーダーシップでそこに行こうとしたけど、偽スメルディアの周りには多くの親衛隊・近衛兵がいる。「どうやるんだ?」「とにかく、やってみないと分からんでしょう!」
行こうとした時に事件が起こりました。

本物のスメルディアを暗殺したプラクサスパスは、本当の事を知っている。そこで、マゴス兄弟は彼を呼んで「本当の事を黙っといてくれたら、ペルシアで我々に次ぐ特権と権力を与える。この話、呑まない?」「NO」と言ったら即処刑。「はい。王よ、そう致します。」「なら、おまえの忠誠心を試したい。今から、宮殿の外側にペルシアの名門貴族を全員集めよ。そして、バルコニーから全員の目の前で、『変な噂が立ち込めているようだが、スメルディア様は本物だ』と宣言せよ。」「はい。分かりました。」

やがて貴族たちが集まり、彼は一大演説をします。何と言ったか。「貴族諸君! このスメルディアは偽者だ! 私は真実を知っている。私が言う事が真実だ!」言い終えるや否や、高いバルコニーから身を投じて自殺。つまり、私の証言は命を懸けて真実を語っているという事です。

そうやってペルシアが混乱している時に、ダレイオスと6人の集団が入って、マゴス兄弟を打ち取った。キュロス王には、もう息子はいません。だけど、ダレイオスはヒュスタスパス経由でキュロスの親戚。しかも、誰にも文句を言わせないように、軟禁状態だったキュロスの娘/元カンビュセスの妻アトッサを自分の妻にした。こうして3代目が**ダレイオス王**。
ダレイオス王とアトッサの間に産まれるのが、**クセルクセス** (アハシュエロス/BC519-BC465) です。

なぜ、歴史書ではクセルクセス王が4代目の王なのか? スメルディアが偽者だから。にせもんを勘定に入れたらアカンという事で4番目の王。でも偽者であっても、ペルシアで7か月間、絶対権力を振るった王に変わりない。なので、聖書はより正確に、5番目がクセルクセスだと言っているのです。

* <キュロス—カンビュセス—(偽)スメルディア—ダレイオス—クセルクセス>

ダニエル 11:2 今、私はあなたに真理を告げる。見よ。(キュロス王の後に) **なお三人の王がペルシアに起こり、第四の者** (クセルクセス王) **は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。**

この書物は、**キュロス**が活着している時に書かれているんですよ。

4代先の事を、たった1節で、正確に語っているのです。

ダレイオスの事を、もう少し説明させて下さい。彼は非常に大きな事業をしました。自分が支配しているアジア全域の全ての諸国に、ペルシアと結ぶ幹線道路“王の道”を造ったのです。王の道を早馬で通って、情報がすぐに中央に集まるように、通信のインフラ・ストラクチャーを構築した。

すなわち、道路網が整備される事によって、情報も富も貿易物品も、全てペルシアに流れ込んで来るシステムの基礎を造ったのがダレイオス。それが完成すると、「我ながらええ事やったのう。俺ってグレート!」で色気が出て、今までアジア全域を支配していたのが、いよいよヨーロッパに進出します。

アジア(東洋)とヨーロッパ(西洋)のボーダーラインはどこか分かりますか?

トルコがある所がアナトリア半島。そして黒海 (Black Sea)。実際海の色が黒い。隣がカスピ海。

アゼルバイジャンの辺りは、とても長生きの人が多いですね。何食べてるの? カスピ海ヨーグルト。

黒海の入出力口にボスポラス海峡・ダーラネス海峡という細い海峡があります。

この海峡から東側がアジア(東洋)、西側がヨーロッパ(西洋)。ここがボーダーラインです。

「全ての道はローマに通ず」という言葉がありますが、アジアにおいては「全ての道はペルシアに通ず」。アジアではペルシアが大きな力を持っていて、インドからエチオピアまで全部、史上最大面積を誇った帝国がペルシアです。

さて、ヨーロッパにすごく元気のある民族がいました。ギリシア人。ギリシア人は血統概念ではなく、ギリシア語を話して、自分がギリシア人だと思っている人は皆ギリシア人です。

私は大阪人。大阪弁を話し、自分を大阪人と思っている。

ギリシア人の特徴は2つあります。

①一番尊い価値観は「自由」。王様に支配されたくない。ギリシアは、一つひとつの都市が国家となった都市国家ポリスで王はいません。直接民主制で、投票でリーダーを決める。民主主義の原点と言われているのがギリシア。自由が一番。

②世界で一番美しく・尊く・価値ある文化はギリシア文化だ。ギリシア文明/ヘレニズム文明。

ギリシア文明の中で最高峰の文明はギリシア語なんですって。彼らは、ギリシア語以外の言葉を話す人々をバルバロイと呼びました。ギリシア人にしたら、外国の言葉は「バルバルバロバロって、あんたら、まともに喋られへんのか?」バルバロイが英語になってバーバリアン(野蛮人)。ギリシア語ができないのは未開の連中。ギリシアがナンバーワンという考えです。

ギリシアにたくさんの都市国家がありますが、そこに問題があると、ご近所なので渡って来て、ペルシアの支配地の中にギリシアの町々もありました。その中のミレトスという町の住民たちが、ペルシアに反乱を起こします。すぐに鎮圧されたけど、実はアテネという都市国家が、密かに支援していたのが分かって「お前、人の縄張りに手を突っ込んで、何ちゅう事してくれるんや!」

ダレイオスは、ギリシアを1度懲らしめておかねばと考えて、BC490に遂に戦争開始しました。

その戦争で一番有名なのが“マラトンの戦い”(BC490)。アテネ軍は1万人。ペルシア軍は3万人。3倍の兵力で、アテネ軍は絶対に勝ち目がないと思われたのに、「ペルシア海軍に上陸されて負けたらあかん」と一生懸命戦う事によって、結果アテネが勝ちました。

この勝利の良いニュースを、マラトンからアテネまで懸命に走り、アテネに着いて「我々は勝った!」と言ってバタッとそのまま絶命した。これがマラソン競技の始まり…作り話です。そんな事はない。それ、出来すぎ君や。

“マラトンの戦い”のほんまの事をお話します。バルカン半島先端のアッティカ半島にマラトンとアテネがあって、距離は約 30 キロ。その間には山がある。マラトン海岸からペルシア軍がドッと来たら、アッティカ半島のポリスが全部やられてしまうから、ここで叩かなあかん。



それで、アテネの兵士を集めたら全員で 1 万人しかいない。ペルシア海軍は 3 万人。だけどアテネが突撃。余りの勇猛果敢な攻撃に、ペルシア海軍はびっくりして逃げた。

アテネ軍は「我々は勝った!」と思ったけど、よく考えると、アテネの全兵士がここにいるという事は、アテネには兵士がゼロ。防衛ゼロ。という事は、ペルシア海軍が半島を回り込んでアテネに来たら、アテネはあっという間に陥落する。そこを狙って、ペルシアは簡単に引き上げたんじゃないの?

「しまった! 逆にハメられたかも?!」という事で、マラトン海岸からアテネまで、何十キロもの重い装備と鎧兜を着けた重装歩兵軍団が、心臓破りの山を越えて、アテネまで必死に帰って来るわけ。

ギリギリ間に合って、ここで布陣を構えている時に、案の定ペルシア海軍が来た。

「あれ? さっき戦った奴らが、もうここにおる…。何で、こんな短時間で移動できるん?」
びっくりして引き上げた。これがマラトンの戦い。ダレイオスがやったギリシアとの戦いです。ダレイオスというすごい人物が登場した事で、ギリシア人は却って闘争心をむき出しにします。

ダレイオス王は道を敷いて大きな利益を得ますが、先行投資で莫大な経済負担がありました。

ダレイオスが亡くなった後を継いだのがクセルクセス (アハシュエロス)。「英雄たちを支配する者」という意味があります。彼はお父さんのダレイオス王が敷いてくれた“王の道”の恩恵を受ける時代の王。アジア中の富・人間・情報、みなペルシアに流れ込んで来て、その負担が全部消え、クセルクセス王は空前の大繁栄時代に突入して、ペルシアは超リッチな国になります。しかしその時、彼もまた、父ができなかった事をやろうとする。ギリシアと戦うのです。よせばいいのに。

時間配分があるので簡単に言います。

クセルクセス王は「ギリシアに行くのはいいけど、親父は 3 万人投入して負けた。だから 30 万人送る。ポリスは 1 個ずつは小さいし、これだけの軍隊を見たらギリシアとて震え上がるだろう。」

ある時、アテネのスパイがペルシア軍に入っている事が分かって、捕まえたら 3 人ぐらいおった。クセルクセス王は情報を探っているスパイを処刑せずに、ペルシアの装備・人数・パワーを全部、案内して見せました。こんなに戦力差があるのが分かれば、ギリシアは「ちょっと勝たれへんから、やめとこ」と思うと思って。

先ほど言った通り、ギリシアにとって一番大事なのは自由です。ペルシア軍を見ていたら、純粋なペルシア人の兵士は殆どいない。植民地の異邦人たちが、王の命令なのでと。だから、ギリシアがペルシアに呑み込まれたら、ペルシアが戦争すると言うたびに、やりたくもない戦争に引っ張り出される。そんな未来が待っているなら、討ち死にしてもいいから戦うと。

ペルシア軍 30 万人がギリシアに入りました。ギリシアの中で、一番強い陸軍を持っていたのがスパルタというポリス。スパルタ教育という言葉はここからです。このスパルタがペルシア軍と戦って全滅。

ペルシアは地上戦で、破竹の勢いでギリシアを征服して行きます。

が、最後の最後に“サラミスの海戦”(BC450)。これは海軍。アテネの罠にかかって、ペルシア海軍がほぼ全滅しました。陸上戦では勝ってる。でも海軍で負けたのを見た時、クセルクセスは「もうダメだ」と戦意喪失してしまうのです。

なぜか？クセルクセスは、30 万以上の兵士の食糧・武器・弾薬をペルシアから船で運んでいました。制海権を失えば補給できなくなる。いくら陸で勝ってるようでも、兵士に食べさせる物がなくなったらもう駄目。それで喪失感・敗北意識に苛まれ、しかも、戦争に同行させていた息子をここで失った。「もう、ギリシアはごめんだ!」とペルシアに帰り、二度とギリシアとの戦争をしませんでした。この瞬間が、ペルシア帝国凋落の始まりです。

ダニエル 11:2 第四の者(クセルクセス王)は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。

奮い立ったギリシアによって、ダレイオスも、そして 10 年後に戦ったクセルクセスも敗北し、ここからペルシアは日(ひ)没する勢いで転落して行くのです。

さて、ギリシアが奮い立った時、ギリシア文化圏で、ある事が起こります。それが 3 節。

ダニエル 11:3 一人の勇敢な王が起こり、大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。

この王こそがアレクサンドロス大王です。英語ではアレキサンダー。

彼はダニエル書 11 章が書かれた、ちょうど 200 年後 (BC356-BC323) に誕生します。

これが書かれた時点では、ギリシアはまだ後進国で力がなく、アレクサンドロスも影も形もない。

しかし、ギリシア文化圏から一人の勇敢な王が現れた。アレクサンドロス。20 歳で王になります。

お父さんのピリッポスが 40 代半ばの、これから一番脂がのる時期に暗殺され、後継者だった彼が自動的に 20 歳でマケドニアの王になりました。マケドニアはギリシアではあるけど、ちょっとバルバロイ。ギリシア語を話すけど、きれいなギリシア語ではない。だから、アテネやスパルタなど、南の方の美しいギリシア語を話す人からは「アイツら、バルバロイ。」

昔、日本の中心が京都だった時は近畿圏が日本の中心。近畿圏の人たちは、それ以外の人たちを蝦夷(えみし)と呼んでいました。きれいな近畿の言葉を話せない人たちの事です。

今は、大阪弁も京都弁も標準語じゃなくなっているけど、昔は関西が中心だったんですよ。

だから、関西を上方(かみがた)と言うのです。上方落語。上方芸人。上と言うのは京都。京都が一番上。東京じゃないんだよ。東京の人がいてたらごめんね。

田舎者と思われていたマケドニアで、アレクサンドロスは 20 歳で王になったけど、ポリスの人たちは「王なんか要らん!」と思っているから、協力し合う事ができない。しかし彼は 2 年間で、歯向かうポリスを平定してしまいました。「はたちの若造に何ができんねん?」と皆が思ったけど、ただの 20 歳じゃない。彼は小さい時から、父親に英才教育、帝王学を学んでいて、家庭教師は哲学者アリストテレス。わざわざアテネから呼んで、少年アレクサンドロスとお友達十数名だけが、小さなアリストテレス私塾で、当時世界最高峰の知性から口移しで、様々な知識や世界の事や帝王学について学んだのです。

アレクサンドロスが 22 歳になった時、ペルシアをギリシアの支配下に置こうと東方遠征。

「ギリシアは全部コントロールできた。これからは、今まで散々ギリシアにダメージを与えた、あのペルシアを懲らしめに行こう。」

出陣式で、友である部下たちに自分の財産を片端からプレゼント。「あそこの領地はお前に。あそこの森は君に。あの広大なオリーブ畑はあなたに。」自分と戦争に行ってくれる人たちに気前良く配って、持ち

物ゼロになった。部下が「王様、あなたに何も残ってないじゃないですか。」「いや、私には希望がある。」カッコイイ!「小さな土地を手放して、君たち友人が付いて来てくれる。アジアは全部、俺の物にするから!」皆しびれて、破竹の勢いでペルシアに向かいます。

ところで、ペルシアは今のイランです。イランの言葉はペルシャ語。イランの絨毯はペルシャ絨毯。イランの猫はペルシャ猫。イランの目の前の海はペルシャ湾。イランはペルシア。ペルシアはイラン。

ギリシア軍 4 万人。食糧は 30 日分しかない。長期戦になれば餓死します。「次々と相手を倒して、軍資金と食糧は現地調達したらいい。お前ら、飢え死にしたくなかったら絶対に戦え!」背水の陣で、ユーフラテスの入り口の所のイッソスまで行って戦う。

ギリシア軍 4 万に対してペルシア軍 60 万。15 倍。無茶苦茶ですよ。

この“イッソスの戦い”(BC333)の時のペルシア王は**ダレイオス 3 世**。彼もイッソスに来ていました。普通、指揮官・一番偉い人は矢が届かない所で指示するのに、アレクサンドロスはそんなんイヤ。どの兵士よりも先頭切って戦う。ダレイオス 3 世がいる戦陣の所までバーッと行った。「何で、こんな所まで来れんねん?!」とびびったダレイオス 3 世は、戦車の向きを変えて逃げ帰ってしまうのです。

王が戦場・現場を手放したら、部下は誰が戦いますか? イッソスの戦場には、おびたしい金銀財宝・弾薬が全部揃って残されました。ダレイオス 3 世は、戦場でも宮殿と同じように生活したくて、特別なテントを作り、贅沢な家具やら何やら揃えて。遊びに来とんのかいと。全財産置いて逃げて行った。

しかも、自分だけ助かりたい一心で、何と彼は、同行させていた自分の母君・お妃・娘たちも置き去りにしたのです。お妃と王女たちは絶世の美女と言われていて、この女性たちが全員アレクサンドロスのものになります。ところが、彼は指 1 本触れようとしない。それどころか丁重に、まるで VIP を接待するように、彼女たちを大切に保護しました。

なぜか? アレクサンドロスは、本気でペルシア帝国を全部自分のものにするつもりだったのです。全てを手に収めて、安定して運営していくためには、ペルシア国民の協力と好意を得なければならない。そのためには、ペルシア国民が大切にしている人たちを大切にする。それで、心をガッチリ掴む事ができる。その判断をしたアレクサンドロスは 23 歳ですよ。どんな男?! 男が男に惚れるというか、エライ人です。が、時間が来ました。ちょっと、はしよります。

結局“アルベラの戦い”で、**ダレイオス 3 世**はまたしても負けます。その時、ギリシア 4 万対ペルシア 100 万ですよ。100 万のペルシアが負ける。どうやって戦ったかは、また別の機会に。めっちゃオモロイ。この時も、ダレイオス 3 世は命からがら逃げ出したけど、無責任さと軟弱さに愛想を尽かした部下たちによって暗殺されました。その瞬間、豪華絢爛なペルシア帝国は遂に滅亡し、帝国は全部**アレクサンドロス**のものになったのです。

アレクサンドロスはペルシア帝国だけでは我慢できず、「もっと行こう。もっと東へ。人間の住む所はどこまでも支配する」と言って、遂にインドまで行きます。だけど、そこで兵士たちが「王様、どこまで行くんですか? 私ら国を出て 8 年間、1 回も帰ってない。そんなに行きたいなら勝手に行って下さい!」とストライキ。さしものアレクサンドロスも、兵士がいないと戦争できないからインドで終わりました。もし兵士がやってなかったら中国まで来ている。どんな人や。

